New Documents on Hokuyo Naniwa Odori and Changes in the "Haru-no-Odori (Spring Dance)" Conducted in Osaka Four Kagais

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/46157

人間社会環境研究　第32号　2016. 9

北陽浪花踊の新出史料と大阪四花街「春の踊」の変遷

人間社会環境研究科　客員研究員
笠　井　津加佐
金沢大学名誉教授
笠　井　純　一

要旨

戦前期の大阪四花街における「春の踊」の関係史料は，大阪大空襲で焼失したと思われていたため，史料に基づく具体的研究は行われてこなかった。しかし近年，北新地（北陽）浪花踊ならびに北陽演舞場に関わる史料多数の存在が確認された。本稿では，この史料群の概要を紹介するとともに，当該史料等を用いて北陽浪花踊を中心とする大阪「春の踊」の振付者・音曲関係者の変遷を跡づけ，各花街の特色追究を試みる。

キーワード

佐藤家史料，北陽浪花踊，大阪四花街「春の踊」，振付者，音曲関係者

New Documents on *Hokuyo Naniwa Odori* and Changes in the "*Haru-no-Odori* (Spring Dance)" Conducted in Osaka Four *Kagais*

Guest Researcher Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies
KASAI Tsukasa
An Emeritus Professor at Kanazawa University
KASAI Junichi

Abstract

It was believed that documents related to "*Haru-no-Odori*" which were popular in Osaka *Kagai* before the Second World War, had been destroyed by the bombing of Osaka in 1945, when Osaka *Kagais* were burned to the ground. To date concrete studies based on historical documents have not been conducted on this subject, though some books have mentioned this topic. Komajiro Sato, a board member of Kitanoshinchi in the early years of the Showa era, saved and safely preserved many documents related to Kitanoshinchi *Naniwa Odori* and *Hokuyo Enbujo*. This study introduces the outline of these documents and examines changes in choreographers and people in charge of music of the Osaka *Haru-no-Odori*, focusing on *Hokuyo Naniwa Odori*, based on the documents. Furthermore, characteristics of each *Kagai* are discussed.

Keyword
Documents of Sato, *Hokuyo Naniwa Odori*, Osaka *Haru-no-Odori* at four Kagais, Choreographers, People in charge of music

はじめに

大阪の花街は昭和20年（1945）の大空襲で焦土と化したため，戦前期花街で隆盛を極めた「春の踊」[1]の関係史料も，全て湮滅したと考えられてきた。したがって，この課題に言及した著述[2]はあっても，史料に基づく具体的研究は皆無に近く，近時注目されている京都花街[3]の調査・研究に比して，著しい径庭がある。しかし，昭和初期に大阪北新地の役員をつとめた佐藤駒次郎は，北新地浪花踊ならびに北陽演舞場に関わる多数の史料を，松竹会長：白井松次郎の別邸（兵庫県芦屋市）に疎開させていた。本稿では，戦災を辛くも免れたこの史料群の概要を紹介するとともに，当該史料等に基づき，北陽浪花踊を中心とする大阪「春の踊」の振付者・音曲関係者についてその変遷を跡づけ，四花街それぞれの特色を追究するための基礎作業を行う。

1　北新地浪花踊の新出史料

佐藤駒次郎が残した史料群は，その没後も娘：笑子と孫：恵が大切に保管したが，両人はその保存を目的として，笠井津加佐に調査・研究を委嘱した。のちに笠井純一も加わって確認したところ，当該史料は下記の通り，数百点にのぼる大部のものであった。

1．北陽浪花踊の映像（昭和４～6，16ミリフィルム）。６缶
2．北陽浪花踊番付（簡易版）第１回（大正４）～第23回（昭和12）。23冊
3．北陽浪花踊番付（愛蔵版）第1，2，6，8，13，15，18回。７冊
4．舞台下絵（書割り）。約250点
5．舞台衣裳下絵。約50点
6．北陽演舞場写真。約100枚
7．北陽浪花踊舞台写真。約100枚
8．北新地芸妓の扮装写真。約300枚
9．その他（佐藤駒次郎宛書簡・葉書，諸記録など）。約50点

以下，主要な史料について若干の説明を加えよう。まず１のフィルムだが，これまで知られてきた北陽浪花踊の映像は，映画「大大阪観光」（昭和12年（1927）上映）[4]に収録された，昭和11年上演の「浪花賑淀川絵巻」のうち，第８景「淀君幻想」および第10景大詰「繁栄の大阪港」の一部のみであった。佐藤家所蔵のフィルムは音源を伴わないが新出史料であり，昭和４年の第15回浪花踊で上演された作品「浮世絵」（岡村柿紅作歌，久保田米斎考証，杵屋佐吉作曲，花柳寿輔振付）が含まれている。この作品は大正13年（1924）９月，第２回花柳舞踊研究会で上演された「彦根屏風」と共通する点が多い[5]。一方，北新地ではすでに大正12年の第９回浪花踊において，「浮世絵」（西川石松，同花子振付，常磐津地）が上演されていた。以上三公演の関係は複雑で，現時点では明らかにできないが，第３節でふれるように花柳流が北新地と関わる時期が大正14年であり，同舞踊研究会の発足とほぼ重なるので，この映像の分析によって知られることは少なくないと思われる。

２・３の番付は，踊の概況を知るうえで特に重要である。簡易版は23回全てが，愛蔵版は７回分が残っているが，大阪各花街の「春の踊」番付を揃えた公的機関等がない現状では，きわめて貴重といえよう。簡易版については既に笠井津加佐が，佐藤恵と共にその全貌を紹介しており[6]，翻刻も完了している。これらにより北新地「春の踊」の実態がほぼ明らかになるだけでなく，四花街全体の芸能を比較検討する指標としても，貴重な役割を果たすものと思われる。そこで筆者らは，佐藤家所蔵番付を基礎に，国立国会図書館，大阪市立中央図書館，大阪府立中之島図書館，関西大学

図書館他が所蔵する番付を加え，さらに『近代歌舞伎年表大阪篇』[7]や雑誌記事等も参照して，大阪四花街「春の踊」の上演関係者の変遷を調査した。結果は第3節で述べる。

4の舞台下絵（書割り）には，北陽浪花踊だけでなく，北陽温習会，北陽日曜会，鶯遊会，踏華会他のものも含まれる。田中良，遠山静雄他の作品であるが，田中のものが特に多く，自筆の下絵原画と，佐藤駒次郎の模写と思われるスケッチブック様の小冊子とがあることが注目される。一例を示すと，図1（後掲，以下同じ）は，第18回浪花踊「産業の大阪」第1場「序曲」原画で，北陽演舞場の用紙に球体を描き，取り巻く雲は薄いブルー一色で，右下に田中良のサインがある。一方，小冊子では同様の図柄が「旭光」と題され，金色の太陽を取り巻く雲はカラフルな色合いである。この相違の理由は，現時点では明らかにできない。

5の舞台衣裳下絵は，田中良，久保田金僊他によるものである。一例を図2として掲げよう。第18回浪花踊「産業の大阪」第4場「御朱印船」で使われた，ペルシャ猫の着ぐるみである。

6の演舞場写真は，その外観だけでなく，舞台や客席・控室の内装（襖絵・板絵・調度品・照明器具から欄間・釘隠しに至る）を詳細に撮影したもので，アルバム1冊に貼付されている。図3は建物正面，図4は同裏面，図5は舞台，図6は観客席で，その最上階は貴賓席と呼ばれていた。図7は貴賓控室の内部である。大正4年4月，大林組によって竣工したこの演舞場は，独特の雰囲気をもつ近代和風建築であった[8]。設計を担当した松本禹象は現場の工事主任も兼ね，精魂を傾けたという。なお大林組には，設計図と共に竣工時の写真が保管されており，佐藤家のそれと同一原版のものが多い。佐藤家写真には，施工者から提供されたものが含まれると思われる。

2　四花街「春の踊」の概要

上演関係者の具体的分析に入る前に，筆者らが知り得た限りで，戦前期大阪四花街（北新地，新町，南地，堀江）における「春の踊」の概要に触れておきたい。残念ながら現時点では，このように初歩的な情報すら，簡単には知ることが出来ないからである。

大阪花街では，京都祇園甲部「都踊」の影響を受け，例年「春の踊」を開催してきた。その嚆矢は明治15年（1882）の北新地「浪花踊」であり，第1回番付には振付者「井上鶴」の名が明記される[9]。この「浪花踊」は，同23年に北新地歌舞練場が焼失するまで続いた。一方，同21年には南地五花街（宗右衛門町，九郎右衛門町，難波新地，櫓町，坂町）で「芦辺踊」が始まり，同41年には新町で「浪花踊」が始まる。北新地浪花踊が途絶えて久しいため，その名称を襲いだものらしい[10]。さらに堀江では，大正3年（1914）から「木花踊（このはな）」（此花踊）を始め，翌4年には北新地でも「浪花踊」が復活した。これ以降，大阪「春の踊」は，各演舞場の焼失・建替え等による若干の休演期間[11]を除くと，日中全面戦争で中断するまで連綿と続けられた。

昭和12年（1937）7月以降の対中国戦線拡大は，大阪興行界にも大きな影響を与えた。同年秋には在阪の大劇場や寄席の入場者が激減し，ニュース映画館のみが盛況と報告されている[12]。9月9日，大阪府は演劇・演芸・映画関係者を集めて時局協議会を開き，大衆娯楽の統制をめざす方針を打ち出した[13]。また10月16日には，カフェや遊廓などの自粛自戒を促す大阪府通牒が発せられている[14]。こうした動向を受け，翌13年1月には花街代表者らが協議の上，「非常時に鑑み」「春の踊」の中止を決定した[15]。新聞報道によれば，中止は新町廓が率先して決め，堀江・南地も倣ったが，北新地は「別の形式」で準備を進めるとある[16]。ただし，その形式等は明らかでない。

昭和16年4月には北陽演舞場で「関西舞踊協会」の結成式が開かれ，楳茂都，藤間，山村，若柳，花柳流など，大阪・神戸・京都の師匠たちが集まって「芸能報国」を申し合わせた[17]。また，同年12月には日本舞踊や邦楽の興行を取締まる通

牒が発せられ[18]，同17年９月には楳茂都協会長を中心とする「関西舞踊配給組合」（仮称）が発足して，衣装配給などの「革新案」を協議している[19]。その一方で大阪府保安課は「春の踊」復活を許可したので，四花街は連合して名称を「豊国踊」と改め，同年11月１日から18日まで北陽・堀江両演舞場で公演した[20]。しかし翌年３月，四花街は再び「無期延期」を決定する[21]。一方，京都「都踊」などがその後も存続したことを考えると，「春の踊」中断の背景には大阪固有の事情があった可能性がある。ただし，その事情が府独自の方針によるものか否かは，今後の追究を必要とする。

３　「春の踊」上演関係者の変遷

大阪「春の踊」を通して戦前期各花街の特色を追究するため，新町浪花踊が始められた明治41年（1908）から日中戦争による中断（昭和12年(1927)）までの担当者について，**表１**（振付者）および**表２**（音曲関係者）を作成した（後掲）。「春の踊」の番付は，北陽浪花踊が全回揃っている。また，新町浪花踊については現時点で17回分（27回中）を閲覧出来たが，南地芦辺踊は8回分，堀江木花踊は２回分の番付を見たにすぎない。しかし，『近代歌舞伎年表大阪篇』他によって記事を補った結果，その概要を知ることが出来た。なお，北陽浪花踊の作歌者や舞台関係者については，笠井津加佐が研究成果を公表している[22]。

まず，**表１**に基づき，振付者の変遷を概観する。

北新地においては大正４年（1915）から同13年まで，西川石松を中心とする西川流が担当していたが，同14年に石松が顧問となる一方，顧問：花柳寿輔（二代目）および幾太郎（四代目芳次郎），徳寿郎（三之輔）が加わって花柳流が振付を行い，昭和12年までこの体制が続いている。しかし，これ以前の北新地では上方舞が中心であった。雑誌『上方』に掲載された元芸妓：佐藤くにからの聞取り記録[23]によれば，くにはまず山村流に習熟したが，友五郎の死後（明治28年）新町の山村流が一時停滞したので，「お座敷が持（ママ）たない」と考えて花柳寿輔（初代）の門を叩いた。楳茂都扇性（二代目）にも師事し，その縁で扇性は明治30年代に，北新地へ稽古に来るようになった。くにはまた，藤間流も習っている。しかし，同じく『上方』に掲載された佐藤駒次郎の叙述[24]によれば，顧客によってテンポの早い東の舞踊が求められたため若柳吉蔵や西川石松を招き，気を悪くした扇性は廓の師匠を断ったので，石松を組合専属の師匠としたという。

このようにみると，佐藤くにが先頭を切って各流派を学び，その後に花街全体が動くようにさえ思える。北新地の「名物」「芸の虫」「廓宝」とまで言われ，80歳を越えて鬘鑁と舞台に立った彼女の力量と，花街への貢献は言うまでもない。さらにその背後にあった贔屓筋や家族の力[25]も手伝って，北陽の多彩かつ奥深い芸風が培われたと考えられる。

新町廓では明治41年（第１回浪花踊）から十年間，楳茂都扇性（二代目）が指導している。中井浩水によれば「久しく確執あつて中絶えたこの名振付を新町では手をつくし言葉をつくし」，「浪花踊だけを引受け」て貰ったという。しかし扇性は大正６年，「十返りの花」を振付けた後に辞し[26]，翌年からは吉蔵を中心とする若柳流が担当した。昭和7年は，藤間（章郎），楳茂都（泰永），キチ・スラビナが見え，同11年には若柳・藤間に楳茂都陸平が加わっている。

南地芦辺踊は，明治41年に吉村，山村の名が見える。一方，『故西川嘉義（かぎ）記念帖　しのふ草』によれば，嘉義は明治42年10月に南地演舞場の専属師匠になったが[27]，それは弟子の嘉幸が五，六年前から堀江廓の師匠をしていて，頻りに来阪を勧めたためらしい[28]。明治44年，嘉義は堀江からも招かれたが，その後故あって南地を去った[29]。『近代歌舞伎年表大阪篇』に記録が見える大正４年以降では，花柳輔次郎と山村若子が同14年まで担当している。同７年以降は花柳寿輔や徳太郎も加わるが，大正末年には寿輔，山村若子と楳茂都扇性の三者となった。昭和２年は花柳流の師匠が姿を消し，扇性と若子のみである（但し同年の番付に

は，寿輔の写真が残っている)。扇性は昭和3年まで担当するが，同年9月に没した[30]ので，同4年以降は藤間章郎が加わった。同8，9年には若柳吉蔵の名が見えるものの，同10年以後は山村若子を中心として，藤間や尾上菊蔵らが加わっている。南地は総じて上方舞の伝統が強く，山村流を核に西川，花柳，楳茂都，藤間，若柳などの諸流が競演していたと言えそうである。

堀江は他の花街に比して，著しい特色がある。中井によれば，木花踊は「歴史物を主題」とし，「玆の名物の義太夫地が人気を呼んだ」。振付は大正3年から同13年まで，西川嘉義を中心とする西川流師匠が担当した。嘉義は明治44年から堀江で教え，その後専属となったが，大正10年3月，木花踊の稽古中に死去した[31]。その後は弟子の嘉幸が継いだが，同14年以降は東京音楽学校出身の若柳吉登代が担当し，吉蔵も昭和7～10年に見える。吉登代が招かれたのは，同廓の作曲者：今藤長十郎が東京音楽学校邦楽調査掛の調査嘱託員をつとめ，『近世邦楽年表』編集に貢献したこと[32]と関係するかもしれない。

次に音曲関係者の変遷を，表2を中心に若干の史料を加え，分野別に略述する。

長唄は，北新地・新町・南地では杵屋一門が担当している。佐吉は新町浪花踊に明治41年（第1回）から関わった。北新地浪花踊は，大正4年の第1回から杵屋勘五郎，猿若山左衛門（十三代目六左衛門，寒玉），杵屋勝太郎，六左衛門（十四代目）らが教えたが，同13年からは佐吉に交替している。この間，大正9年から昭和12年まで続けて指導にあたった六喜正と，その姪・登美（佐吉門下）を特筆すべきであろう。また南地では，六四郎，長三郎，勝太郎，和吉，正一郎らが，順次担当している。一方，堀江は一貫して今藤長十郎が中心であった。

常磐津は，佐藤くにによると，岸沢己佐吉（後に仲助）が大阪に来たのが最初であった。彼女も芸妓時代に稽古を始めたというので，妓籍を辞した明治30年以前のことである。その後，常磐津式作（二代目林中）が来阪した。北陽では大正4年（第1回）から同8年まで，林中が見える。中井によれば「地方に長唄と常磐津とを併用したのは玆（北新地）が始まり」で，林中に従った文字八の名が知られていたという。これに比して他の三廓では，常磐津の導入が少し遅れるかもしれない。表2によれば，新町では大正11年の演舞場改築後に松尾太夫他が見え，堀江では大正13，昭和9，10，12年に文字八，南地では昭和9，10年に文字兵衛の名が見える。但し堀江では，大正4年時点ですでに，芸妓が文字八・松尾太夫・国太夫に就いて稽古に励んでいるという[33]。また同7年の演舞場再建落成式において，新曲「不老長春」が上演されているが，その作曲者として文字八の名がみえる[34]。一方南地では，昭和2年の番付（第43回）に既に「文字兵衛」の写真が掲げられており，昭和4年（第45回），同5年（第46回）も同様である。すなわち，「春の踊」の番付に列記された氏名のみによって，音曲の導入を推定することは避けるべきであろう。

清元の導入も北新地が早かったようである。佐藤くににによれば，大阪の粋人・平瀬露香が，清元延寿太夫を吉原の幇間：露助と共に北新地の茶屋：綿屋に招いたのが始まりで，露助は大阪に残って稽古をつけたという。しかし表2によれば，北陽浪花踊では清元地の舞踊を昭和8年まで上演していない。その後は同10年を除き，同12年の中断まで栄寿太夫，菊輔が見える。新町では既に大正7年から同14年まで栄寿太夫が見える。また南地には，佐藤くににによると順三という師匠がいたようだが，芦辺踊に梅吉が加わるのは昭和初年らしい[35]。堀江では，清元地の舞踊は上演しなかったようである。

なお長唄，常磐津，清元の大阪花街への導入については，佐藤駒次郎が，「おくにさんが芸好きであつたため，北新地へ長唄，清元，常磐津といつた風の東京の芸を移し，それが全大阪の花街に伝はり現在のやうな殷盛を招来した」と述べていることが注目される[36]。舞踊だけでなく音曲面においても，くにの貢献は大きかったといえよう。

浄瑠璃は堀江に顕著で，大正3年以降，竹本弥

太夫，豊沢小団二，野沢吉弥，鶴沢燕四，同才治の名がみえる。また南地でも，昭和９年以降，鶴沢綱造がみえる[37]。

鳴物については，北新地・南地は望月，堅田が担当した。六合新三郎が担当した堀江においても，大正末年に梅屋，住田の名が見えるものの，昭和９年以降は堅田が進出している。一方，新町は宝，福原，住田が担当していて，截然と分れている。望月と堅田は親族の縁であり，宝と福原も師弟関係にあるから，両者が分かれるのも故なしとしないが，明治末年に名跡をめぐる問題があったこと[38]も関係するかもしれない。

洋楽は北新地が特に早く，大正12年に弘田龍太郎の名が見える。弘田は新舞踊運動の魁となった踏影会の同人であり[39]，やはり同人であった田中良が同年から「舞台考案」を務めたことと相俟って，この運動をいち早く取り込もうとする北新地の意気込みが伝わってくる。その後も北新地では，昭和６年以降に松平信博，平茂夫，島国夫，橘薫らが見える。一方新町では，昭和８，10年に永井巴，同11年に山田兵吉が見えるが，南地と堀江には全く現れない。

むすびにかえて

以上，不充分ではあるが新出史料を紹介しつつ，戦前期の大阪四花街で上演された踊と音曲の変遷をたどってきた。各花街の特色を解明するには至らなかったが，その輪郭は少しずつ見えてきたと思われる。そこで，この課題を追究する意義を考えるため，雑誌『上方』を編集・刊行し続けた南木芳太郎の一文を引用したい。

> 上方の遊郭は上方に繁栄を齎した主動力となつてゐる，江戸時代から諸種の取引，分けて大阪は蔵屋敷との商談，懐柔策等がすべて遊郭を中心として円滑に運ばれてゐた。(中略)一面文化史の上に社会相の上に見逃すことの出来ない深い関係と味を持つてゐる。[40]

大阪四花街はそれぞれの歴史的背景のもとに，独特の芸風を伝えてきた。その分析は芸能史研究の枠にとどまることなく，各花街に集う人士の傾向やその動向を知ることにつながり，近代都市大阪の社会・経済構造を追究するうえでも有益な視点を提供する可能性がある。大阪社会を知悉する同時代人：南木の言は示唆に富んでおり，これを裏付ける根拠として，本稿で紹介した史料群の分析や，史実を追究することの意義は大きいと言えよう。

【注】

1) 近代大阪における“はるのおどり”には，本稿が対象とする四花街の「春の踊」とは別に，大阪松竹座における「春のおどり」があり，同劇場の開場３周年を記念して1926年に創始された。

2) 加藤政洋『花街・異空間の都市史』(朝日新聞社，2005年)，横田洋「浪花踊り―大阪の花街と春の踊り」(橋爪節也編著『映画「大大阪観光」の世界―昭和12年のモダン都市―』大阪大学出版会，2009年，pp. 70－71)。

3) 京都花街全体を通してその事業システムを追究したものに，西尾久美子「伝統文化産業の事業システム―京都花街の事例―」(神戸大学経営学研究科『Discussion Paper』2006・28，2006年，pp. 1－28)がある。また祇園甲部を扱った研究に，松田有紀子「「花街らしさ」の基盤としての土地所有―下京区第十五区婦女職工引立会社の成立から―」(『Core Ethics』第6号，2010年，pp. 401－411)，岡田万里子『京舞井上流の研究』(思文閣出版，2013年)，長田豊臣『無形文化財と記録・保存―都をどりの16ミリ映画を題材として―』(研究成果報告書，2001年)等があり，上七軒を扱った研究に，竹中聖人「歴史的環境としての花街とまちづくり―北野上七軒を例に―」(『Core Ethics』第２号，2006年，pp. 153－164)，同「花街の真正性と差異化の語り―北野上七軒と五番町をめぐって―」(『同』第３号，2007年，pp. 249－258)，中原逸郎「花街の芸の再創造―京都上七軒における石田民三の寄与を中心に」(『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』第73号，2012年，pp. 57－77)等がある。

4) 大阪市交通局・交通サービス株式会社企画『昭和

レトロ映像②』所収。この映画については，橋爪節也「「観光映画」という迷宮―『大大阪観光』の世界―」（『映画「大大阪観光」の世界―昭和12年のモダン都市―』）が，浪花踊の映像については，横田洋氏が詳しく解説している（注２）参照）。

5) 花柳舞踊研究会の上演目については，末廣惠保『花柳舞踊研究会上演記念画集』（1935年）による。

6) 笠井津加佐・佐藤恵「浪花踊に関する史料調査―佐藤家伝来の浪花踊番付（第一回～第六回）」（『人間社会環境研究』第28号，2014年，pp. 211－231），同「同（第七回～第十五回）」（『同』第29号，2015年，pp. 101－122），同「同（第十六回～第廿三回）」（『同』第30号，2015年，pp. 227－249）。

7) 国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表大阪篇』第１～９巻（八木書店，1986～2015年）。

8)「曽根崎新地演舞場新築工事梗概」（『建築雑誌』第343号，1915年，pp. 57－66）には，この建築物（大阪市北区曽根崎新地３丁目，現在の地名表記は同２丁目）についての詳しい情報が記される。

9) 佐藤家所蔵浪花踊番付（1915年，復活第１回，愛蔵版）には，口絵として第１回番付（1882年，生田南水所蔵）の写真が掲載されており，「作 二畳庵，振付 井上鶴，長唄 玉村芝楽，調 坂東定次郎，長唄 坂東滝丸，三弦 坂東徳三郎，鳴物 中村吉造，笛 小川源治」と読み取ることができる。

10)『明治大正大阪市史』第１巻（1933年）p. 811，上田長太郎「大阪廓の踊と演舞場の起源」（『上方』第４号，1931年，pp. 80－84）。

11) 堀江演舞場は1916年の出火で焼失したため，翌年の「木花踊」は休演した。また新町演舞場は建替えのため，1919年から1921年まで３年間休演している。南地では1889～1891年の３年間，芦辺踊を年２回ずつ上演した。1932年には南演舞場大改築のため休演し，1933年４月に第48回を同演舞場で開いた。その後の公演状況はやや複雑である。第49回の開催記録は現時点では検出できていない。第50回（1934年４月）・第51回（1935年４月）は大阪歌舞伎座に会場を移したが，第52回（1936年４月）は南演舞場，第53回（1937年４月）は大阪角座と推移している。

12)『大阪朝日新聞』1937年９月30日付紙面「ニュース映画ならでは 青息吐息の大劇場や寄席 大阪歓楽街の事変色」。大阪商工会議所の影響調査に基づく記事。

13)『大阪朝日新聞』1937年９月８日付紙面「マンオも芝居も戦時総動員だ 九日に“統制”協議会」，『同』９月10日付紙面「“笑ひと涙”も総動員“しつかりやります”と誓ふ 演芸陣の非常時大評定」。『新修大阪市史』第７巻（1994年），p. 899。

14)『大阪朝日新聞』1937年10月19日付紙面「非常時の認識へ 紅灯街，心の武装 毎月講演，外国の真似は禁止 興行界へも自粛のお達し」。

15)『大阪朝日新聞』1938年１月23日付紙面「「春の踊」は中止だ 大阪の四遊廓役員会で決定 浪華の名物今年は非常時／宝恵駕も遠慮 姐さん連は紋付で徒歩参詣 初天神“静粛”の構へ」。

16)『大阪毎日新聞』1938年１月23日付紙面「国民総動員だ 新町浪花踊中止 北陽は別の形式で準備を進む」。

17)『大阪朝日新聞』1941年4月22日付紙面「踊の世界も新体制」。『演芸画報』1941年５月号（p. 29）によれば，「大阪京都兵庫の舞踊家を網羅したもので，会長が若柳吉蔵，総務が楳茂都陸平，副会長が花柳芳次郎に藤間勘右衛門といふ顔触れださうである」とあるが，『同』同年７月号（p. 34）では，「会長は楳茂都陸平，純大阪人としてこれは無理のない所であらう。若柳吉蔵は名誉会長，花柳芳次郎，藤間勘右衛門，山村若といつたところが副会長だと聞いた。これも新体制下のいい産物だ」と記している。

18)『大阪朝日新聞』1941年12月13日付紙面「日本舞踊や邦楽にも旧体制興行は認めず 府が取締通牒」。

19)『大阪毎日新聞』1942年９月６日付紙面「舞踊界も新体制 衣裳等の配給組合を設立」。

20)『大阪毎日新聞』1942年９月11日付紙面「五年振り 浪花踊り復活 未熟な芸妓の出演は御法度」，『同』10月21日付紙面「浪花踊十一月から復活」。

21)『大阪毎日新聞』1943年３月21日付紙面「“豊国踊”は無期延期 京の都踊は存続」。

22) 笠井津加佐「「北陽浪花踊」の特徴への試論―作歌者，詞章構成，詞章と視覚表現との関係をめぐって―」（『人間社会環境研究』第31号，2016年，pp. 1－18）。

23) 佐藤くに「曽根崎夜話（一）」（『上方』第28号，1933年，pp. 72－75），同「同（二）」（『同』第30号，1933年，pp. 56－59）。以下，佐藤くにの叙述は全てこれによる。

24) 佐藤駒次郎「北新地の変遷」（『上方』第51号，1935年，pp. 78－80）。

25) 一例を挙げると，くにの夫は北新地で力のあった

小林剛三であり，剛三を扶けたのが技芸部長：佐藤駒次郎であった（中井浩水「回顧 春の踊」『上方』第4号，1931年，pp. 74－79）。以下，中井の叙述は全てこれによる。

26) 魯鶏子「楳茂都流の舞踊」（『演芸画報』1921年2月号）には，扇性について次のように記されている。「晩年先代は新町廓から頼まれて振付師匠となつた，今の扇性氏も此時は父と共に新町の師匠で後に新町から手を引き，北の新地と神戸との芸者を教へ，十数年前に北の新地の師匠をやめて新町へ迎へられ（中略）十年後の春の浪花踊「十返りの花」の振付をしてから再び新町の師匠を断つた」。この記述によれば，扇性（二代目）が北新地の芸妓を教えたのは明治40年（新町浪花踊の開始）以前であるが，佐藤くにが芸妓時代に習ったのであれば明治30年以前からということになる。なお，初代扇性は明治27年に没しているので，二代目は名跡を継いだ後，若干年で新町から「手を引」いたのかもしれない。

27) 西川嘉儀紀念帖編纂会『故西川嘉義記念帖 しのふ草』（1922年）所収の，「西川嘉儀略伝」（嘉義の子：吉田薫の執筆）による。

28) 「名家真相録 西川嘉儀」（『演芸画報』1911年9月号）。嘉義は「私の弟子の西川嘉幸と申しますのが，五六年前大阪へ参つて堀江に入込で居りまして，頻に勧めますし，同時にあるお方のお口添も乙いましたので，一昨年当所へ参り，南地の方をお預りすることになりましたのです。その内嘉幸は嫁入ることになり，（中略）この二月ばかり前から，堀江の方も私が参りますことになりました。」と語っている。

29) 注27）に同じ。

30) 『新撰芸能人物事典 明治～平成』「楳茂都扇性（2代目）」（日外アソシエーツ株式会社，2010年）。

31) 注27）に同じ。

32) 『新撰芸能人物事典 明治～平成』「今藤長十郎（2代目）」（注30）参照）。

33) 注27）に引用された『大阪毎日新聞』1915年5月18日付の記事によれば，「（木花踊の）地には名古屋出の杵屋喜寿正，作曲に東京音楽学校嘱託教師の今藤長十郎，鳴物同六合新三郎を有ち妓達は別に常磐津文字八，松尾太夫，国太夫等に就いて任意に稽古を励んでゐる。」とある。但し，長唄の杵屋喜寿正は番付に名が見えない。

34) 『近代歌舞伎年表大阪篇』第6巻（1991年）p. 254。新曲「不老長春」は，作歌井関鴨洲，作曲常磐津文字八，長唄今藤長十郎，振付西川嘉儀，鳴物六合新三郎で上演された。「上・下」の二部構成で，「上」が常磐津地，「下」が長唄地であったという（『大阪毎日新聞』1917年12月16日記事による）。

35) 芦辺踊の番付には，第43回（1927年），第45回（1929年），第46回（1930年）に，清元梅吉の顔写真が掲載されている。ただし，芦辺踊の音曲担当者として記録に見えるのは，1934年以降である。

36) 佐藤駒次郎「舞媼佐藤くにさん」（『上方』第73号，1937年，p. 21）。

37) なお，1929年（第45回）及び1930年（第46回）の芦辺踊番付は，鶴沢綱造と豊沢団友の写真を掲げている。

38) 『国史大辞典』第9巻「宝山左衛門（二）」（吉川弘文館，1988年），同第13巻「望月太左衛門（七）」（同，1992年），『新撰芸能人物辞典 明治～平成』「宝山左衛門（2代目）」「望月朴清（3代目）」（注30）参照）。

39) 『踏影』第1号（1922年）に掲載された「同人名簿」による。

40) 『上方』第28号（1933年）巻末の「編輯者より」による。

付記　本稿の内容は，第66回東洋音楽学会大会（2015年11月，東京藝術大学音楽学部）において発表したものである。席上ならびに会場等でご教示を種々賜った会員諸氏に，厚く御礼申し上げたい。但し同学会の機関誌には，本稿のような史料群を紹介する枠が無いので，この内容を速やかに学界に公開したいと考える筆者らは，同学会の諒解のもと，ここに報告する次第である。

大西秀紀氏ならびに古川武志氏からは，ご所蔵の浪花踊音源を提供していただいた。さらに古川氏は，史料の所在について種々教示を与えられただけでなく，戦前の北新地を知る方々を紹介された。また大林組社史課は，北陽演舞場の設計図・写真等のデータを惜しみなく提供された。このほか，現時点ではお名前を記すことができないが，聞き取り調査や資料提供等でお世話になった方も数多い。あわせて厚く御礼申し上げる。

図版

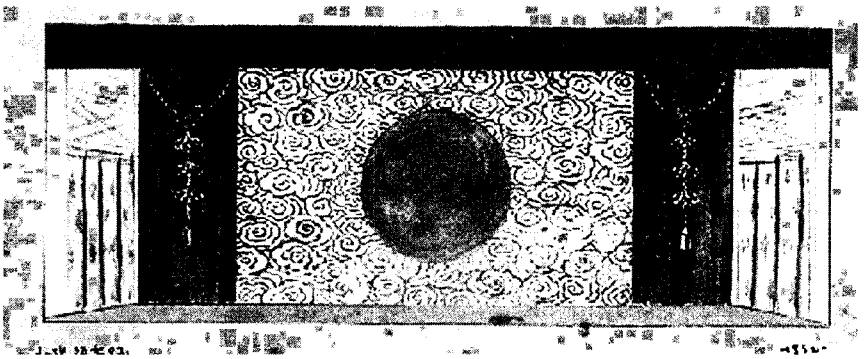


図1　舞台下絵（「産業の大阪」第1場「序曲」。田中良による）

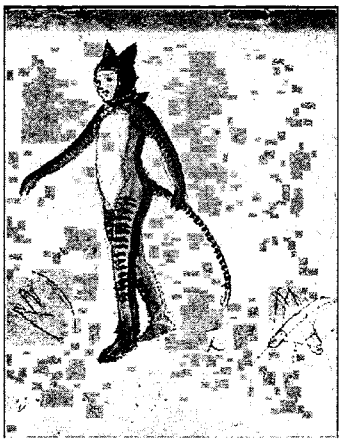


図2　舞台衣装下絵（「ペルシャ猫」）



図3　北陽演舞場（東南角より）

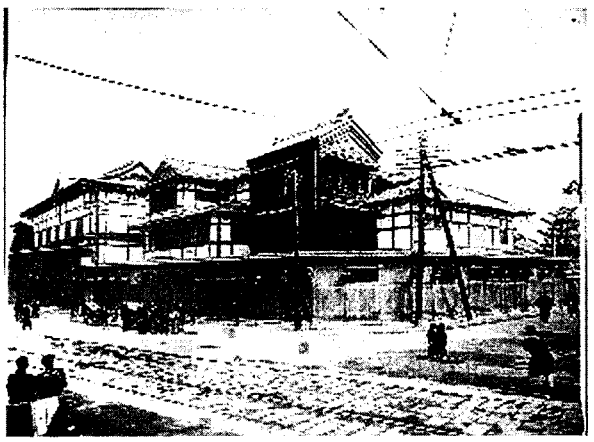


図4　北陽演舞場建物裏面（北西角より）

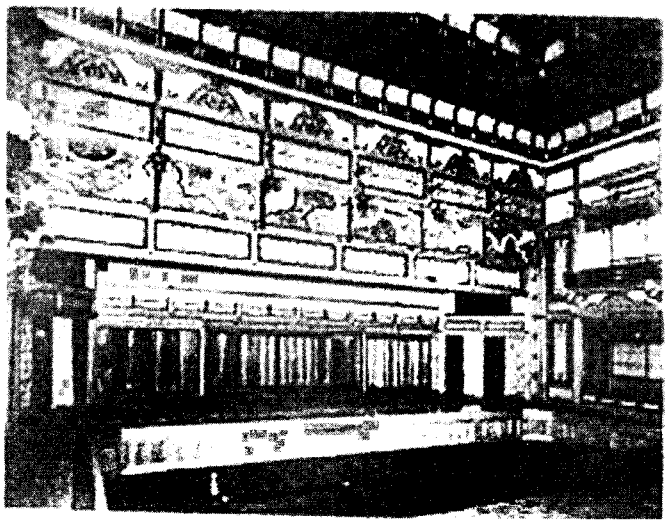


図5　北陽演舞場舞台

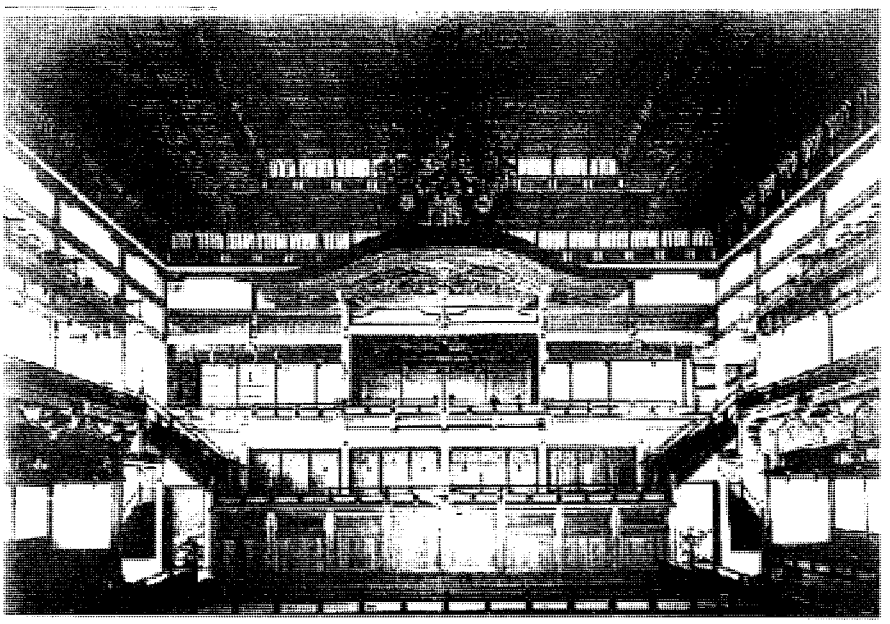


図6　北陽演舞場客席



図7　貴賓控室の内部

表1．大阪四花街「春の踊」振付者の変遷（明治41年～昭和12年）

花街（年代）	北新地 浪花踊		新町 浪花踊		南地 芦辺踊		堀江 木花踊	
明治41	–		1	楳茂都扇性③	24	吉村，山村⑥	–	
明治42	–		2	楳茂都扇性⑦	25		–	
明治43	–		3	楳茂都扇性④	26		–	
明治44	–		4	楳茂都扇性⑦	27		–	
明治45	–		5	楳茂都扇性③	28		–	
大正2	–		6	楳茂都扇性①	29		–	
大正3	–		7	楳茂都扇性①	30		1	澤田天来（舞楽），西川嘉義①
大正4	1	西川石松，花	8	楳茂都扇性②	31	花柳輔次郎，山村若子，はる	2	西川嘉義
大正5	2	西川石松，花	9	楳茂都扇性④	32	花柳輔次郎，山村若子，はる	3	西川嘉義
大正6	3	西川石松，花子	10	楳茂都扇性⑦	33	花柳輔次郎，山村若，はる	–	
大正7	4	西川石松，花子	11	若柳吉蔵①	34	花柳寿輔，徳太郎，輔次郎，山村若子，はる子	4	西川嘉義，服部嘉徳③
大正8	5	西川石松，花子	–		35	花柳寿輔，徳太郎，輔次郎，山村若子，	5	西川嘉義，嘉徳
大正9	6	西川石松，花子／信松，霞中	–		36	花柳寿輔，徳太郎，輔次郎，山村若子	6	西川嘉儀，嘉徳
大正10	7	西川石松，花子／信松，霞中	–		37	花柳寿輔，徳太郎，輔次郎，山村若子②・③	7	西川嘉儀
大正11	8	西川石松，花子／信松，霞中	12	若柳吉蔵，吉輔，吉登美②	38		8	西川嘉幸
大正12	9	西川石松，花子／信松，霞中	13	若柳吉蔵，吉喜美，坪内士行，［若柳吉輔］②	39	花柳輔治郎，山村若子	9	西川嘉幸
大正13	10	西川石松，花子／信松，霞中	14		40		10	西川嘉幸，嘉徳⑫
大正14	11	花柳幾太郎，徳寿郎，西川石松（顧問），花柳寿輔（顧問）	15	若柳吉蔵②	41	花柳輔治郎，山村若子	11	若柳吉登代
大正15	12	花柳芳次郎，三之輔，寿輔／寿栄弥	16	若柳吉蔵	42	花柳寿輔，山村若子，楳茂都扇性⑧	12	
昭和2	13	花柳芳次郎，三之輔，寿輔／寿栄弥	17		43	楳茂都扇性，山村若子②	13	若柳吉登代
昭和3	14	花柳寿輔，芳次郎，三之輔／寿栄弥	18	若柳吉蔵③	44	楳茂都扇性，山村若子⑨	14	
昭和4	15	花柳寿輔，芳次郎，三之輔／寿栄弥	19	若柳吉蔵②	45	山村若子，藤間章郎②	15	
昭和5	16	花柳寿輔，芳次郎，三之輔	20		46	山村若子，藤間章郎⑤	16	若柳吉登代
昭和6	17	花柳寿輔，芳次郎，三之輔／寿栄弥	21	若柳吉蔵⑩	47	山村若子，きく子，小若③	17	若柳吉登代⑩
昭和7	18	花柳寿輔，芳次郎，三之輔	22	若柳，藤間，楳茂都，ｷﾁ・ｽﾗﾋﾞﾅ	–		18	若柳吉蔵，吉登代
昭和8	19	花柳寿輔，芳次郎，三之輔	23	若柳吉蔵，楳茂都泰永，藤間章郎③	48	若柳吉蔵，山村若子，きく子，小若⑪	19	若柳吉蔵
昭和9	20	花柳寿輔，芳次郎，三之輔／芳六次	24	若柳吉蔵，藤間章郎③	50	若柳吉蔵	20	若柳吉蔵
昭和10	21	花柳寿輔（演出），芳次郎，三之輔／芳六次，芳七郎	25	若柳吉蔵，藤間章郎②	51	山村若子，藤間章郎，山村きく，尾上菊蔵／山村小若，藤間芳右衛門③	21	若柳吉登代，吉蔵（指導）
昭和11	22	花柳寿輔（演出），芳次郎，三之輔／芳六次，芳七郎	26	若柳吉蔵，楳茂都陸平，藤間章郎③	52	山村，藤間	22	若柳吉登代
昭和12	23	花柳寿輔（演出），芳次郎，三之輔／芳六次，芳七郎	27		53	山村若子，きく，尾上菊蔵	23	若柳吉登代

○北新地「浪花踊」の振付者は，佐藤家所蔵番付による。他は、以下に注記しない限り，『近代歌舞伎年表大阪篇』による。

① 国立国会図書館所蔵番付。　② 大阪市立中央図書館所蔵番付。　③ 大阪府立中之島図書館所蔵番付。

④ 関西大学図書館所蔵番付。　⑤ 北新地「鶴太良」所蔵番付。⑥『演芸画報』明治41年5月号。⑦『同』大正10年2月号。

⑧『同』大正15年5月号。　⑨『同』昭和3年5月号。　⑩『同』昭和6年5月号。　⑪『同』昭和8年5月号。

⑫『大阪春秋』134号水知紹介文。

○欄中の「／」は，番付が振付者の格付けを変えていることを示す。

○新町浪花踊の欄にみえる［　］で囲った人名は，「技芸部専属師匠」を示す。

表2. 大阪四花街「春の踊」音曲関係者の変遷（明治41年～昭和12年）

花街（年代）	北新地 浪花踊		新町 浪花踊		南地 芦辺踊		堀江 木花踊	
明治41	-		1	杵屋佐吉 宝山左衛門，福原鶴三郎	24		-	
明治42	-		2		25		-	
明治43	-		3	杵屋佐吉 福原鶴三郎	26		-	
明治44	-		4		27		-	
明治45	-		5	杵屋佐吉 福原鶴三郎	28		-	
大正２	-		6	杵屋佐吉 福原鶴三郎	29		-	
大正３	-		7	杵屋佐吉 福原鶴三郎	30		1	今藤長十郎 六合新三郎，三木正一 竹本弥太夫，豊沢小団二
大正４	1	杵屋勘五郎 常盤津林中，文字兵衛 望月太左衛門，長左久	8	杵屋佐吉 福原鶴三郎	31	杵屋六四郎，長谷川徳翁	2	今藤長十郎 六合新三郎 豊竹小団二
大正５	2	猿若三左衛門 常磐津林中 望月太左衛門	9	杵屋佐吉 福原鶴三郎	32	杵屋六四郎 望月長左久，小川てる	3	今藤長十郎 六合新三郎
大正６	3	猿若山左衛門 常磐津林中 望月太左衛門	10		33	杵屋六四郎 望月長左久	-	
大正７	4	猿若山左衛門 常磐津林中，文字八 望月太左衛門，長左久	11	杵屋佐吉 福原鶴三郎 清元栄寿太夫	34	杵屋六四郎，長三郎 望月長左久	4	今藤長十郎 六合新三郎，杵屋千代 野沢吉弥〔写真・年表〕
大正８	5	猿若山左衛門，杵屋喜太六 常磐津林中，文字八 望月太左衛門，長左久	-		35	杵屋文(ママ)四郎，長三郎 望月長左久	5	今藤長十郎 六合新三郎 野沢吉弥
大正９	6	杵屋勝太郎／六喜正 常磐津文字太夫，文字八 望月太左衛門，長佐久／たつ，太喜之助	-		36	杵屋六四郎，長三郎 望月長左久，太左衛門	6	今藤長十郎 六合新三郎 野沢吉弥
大正10	7	杵屋寒玉，六左衛門，喜多六／六喜正 常磐津松寿斎，文字八 望月朴清，太左衛門／太津，太喜之助	-		37	杵屋六四郎，和三郎 望月太左衛門，朴清	7	今藤長十郎 六郷新三郎 鶴沢燕四
大正11	8	杵屋寒玉，六左衛門，喜多六／六喜正 常磐津文字八 望月朴清，太左衛門／太津，太喜之助	12	杵屋佐吉，佐歌江，〔坂東つる〕 常磐津松尾太夫，清子 福原鶴三郎，住田多蔵 〔清元栄寿太夫，橋繁検校(地)〕	38		8	今藤長十郎 六合新三郎 鶴沢燕四
大正12	9	杵屋寒玉，六左衛門／喜多六，六喜正 常磐津文字八 望月朴清，太左衛門／太津，太喜之助 弘田龍太郎(洋)	13	杵屋佐吉，佐歌江，〔坂東つる〕 〔常磐津松尾太夫，清子〕 福原鶴三郎，住田多蔵 清元栄寿太夫，寿々栄，橋繁大検校(琴胡弓)	39	杵屋六四郎，和三郎	9	今藤長十郎 六合新三郎 鶴沢燕四
大正13	10	杵屋佐吉／六喜正 常盤津文字八／理喜蔵 望月朴清，太左衛門／太津，堅田喜三郎	14		40		10※	今藤長十郎，杵屋口蔵 常磐津文字八 梅屋勘兵衛，住田多蔵 鶴沢燕四，吉久啓子(地)

大正14	11	杵屋佐吉／六喜正 常盤津文字八／理喜蔵 望月朴清，太左衛門／多津，堅田喜三郎	15	杵屋佐吉 常磐津松尾太夫 福原鶴三郎，住田多蔵 清元栄寿太夫	41	杵屋勝太郎	11	今藤長十郎 梅屋勘兵衛，住田多蔵 鶴沢才治
大正15	12	杵屋佐吉／六喜正，とみ 常盤津文字八／理喜蔵，吉川幸万(琴) 望月朴清，堅田喜惣治／望月太津，堅田喜三郎	16	杵屋佐吉 常磐津松尾太夫 福原鶴三郎，住田多蔵	42	杵屋勝太郎	12	今藤長十郎※
昭和2	13	杵屋佐吉／六喜正，とみ 常盤津文字八／理喜蔵 望月朴清，堅田喜惣治／望月太津吉，太津，堅田喜三郎	17		43	杵屋勝太郎 堅田喜三次	13	今藤長十郎
昭和3	14	杵屋佐吉／六喜正，登美 常盤津文字八／理喜太夫 望月朴清，堅田喜惣治／望月太津吉，堅田喜三郎	18	杵屋佐吉 常磐津松尾太夫 福原鶴三郎，住田多蔵	44		14	今藤長十郎※
昭和4	15	杵屋佐吉／六喜正，登美 常盤津文字八／理喜太夫 望月太左衛門，堅田喜惣治／望月太津吉，堅田喜三郎	19	杵屋佐吉 常磐津松尾太夫 福原鶴三郎，住田多蔵	45	杵屋和吉 望月朴清，太喜之助	15	今藤長十郎※
昭和5	16	杵屋佐吉／六喜正，登美 常盤津文字八／理喜太夫 望月太左衛門，堅田喜惣治／望月太津吉，堅田喜三郎	20		46	杵屋和吉 望月朴清，太喜之助	16	今藤長十郎
昭和6	17	杵屋佐吉／六喜正，登美 常盤津文字八／理喜太夫 望月太左衛門，堅田喜惣治／望月太津吉，堅田喜三郎 松平信博(洋)，平茂夫(洋)	21	杵屋佐吉 中山晋平(小唄)	47	杵屋和吉 望月朴清，太喜之助	17	今藤長十郎※
昭和7	18	杵屋佐吉／六喜正，登美 望月太左衛門，堅田喜惣治／望月太津吉，堅田喜三郎 松平信博(洋)，平茂夫(洋)	22	杵屋佐吉	-		18	今藤長十郎 野沢吉弥※※
昭和8	19	杵屋佐吉／六喜正，登美 常磐津文字八／理喜太夫 望月太左衛門，堅田喜惣治／望月太津吉，堅田喜三郎 清元栄寿太夫，島国夫(洋)，平茂夫(洋)／清元菊輔	23	杵屋佐吉 常磐津松尾太夫 福原鶴三郎，住田多蔵 佐々紅華(小唄)，古賀正男(同)，永井巴(洋)	48	杵屋正一郎※※※	19	今藤長十郎
昭和9	20	杵屋佐吉／六喜正，登美，登喜 常磐津文字八／理喜蔵，理喜太夫 望月太左衛門／太津吉，太津三郎，堅田喜三郎 清元栄寿太夫，島国夫(洋)，町田嘉章(民謡)，平茂夫(洋)，清元菊輔	24	杵屋佐吉 福原鶴三郎	50	杵屋正一郎 常磐津文字兵衛 清元梅吉，鶴沢綱造	20	今藤長十郎 常磐津文字八 堅田喜惣治 野沢吉弥
昭和10	21	杵屋佐吉／六喜正，登美，登喜 常磐津文字八／理喜蔵，理喜太夫 望月太左衛門，堅田喜惣治／望月太津吉，堅田喜三郎，望月太津三郎 橘薫(洋)、平茂夫(洋)	25	杵屋佐吉 福原鶴三郎，住田多蔵 永井巴(洋)	51	杵屋正一郎／静 常磐津文字兵衛／文字伊都 望月朴清／太津吉，太喜之助 鶴沢綱造，清元梅吉／梅喜美	21	今藤長十郎 常磐津文字八 堅田喜惣治 野沢吉弥

昭和11	22	杵屋佐吉／六喜正, 登美, 登喜 常磐津文字八／理喜蔵, 理喜太夫 望月太左衛門, 堅田喜惣治／望月太津吉, 堅田喜三郎, 望月太津三郎 清元栄寿太夫／菊輔	26	杵屋佐吉 福原鶴三郎, 住田多蔵 山田兵吉(洋)	52		22	今藤長十郎
昭和12	23	杵屋佐吉／六喜正, 登美, 登喜 常磐津文字八／理喜蔵, 理喜太夫 望月太左衛門, 堅田喜惣治／望月太津吉, 堅田喜三郎, 望月太津三郎 清元栄寿太夫, 菊原琴治(地), 島国夫(洋)／清元菊輔	27		53	杵屋正一郎 望月朴清 鶴沢綱造	23	今藤長十郎 常磐津文字八 堅田喜惣治 野沢吉弥

○各年次の音曲関係者は，欄の上段から，「長唄」，「常磐津」，「鳴物」，「清元，浄瑠璃，洋楽等」の順に記載した。但し，この順番は便宜上のもので，番付等の配列とは必ずしも一致しない。

○欄中の「／」は，番付が関係者の格付けを変えていることを示す。

○新町浪花踊の欄にみえる[　]で囲った人名は，「技芸部専属師匠」を示す。

○出典は，以下に注記しない限り，表1と同様である。

※『大阪春秋』134号水知紹介文。　※※『演芸画報』昭和7年5月号。　※※※『同』昭和8年5月号。